

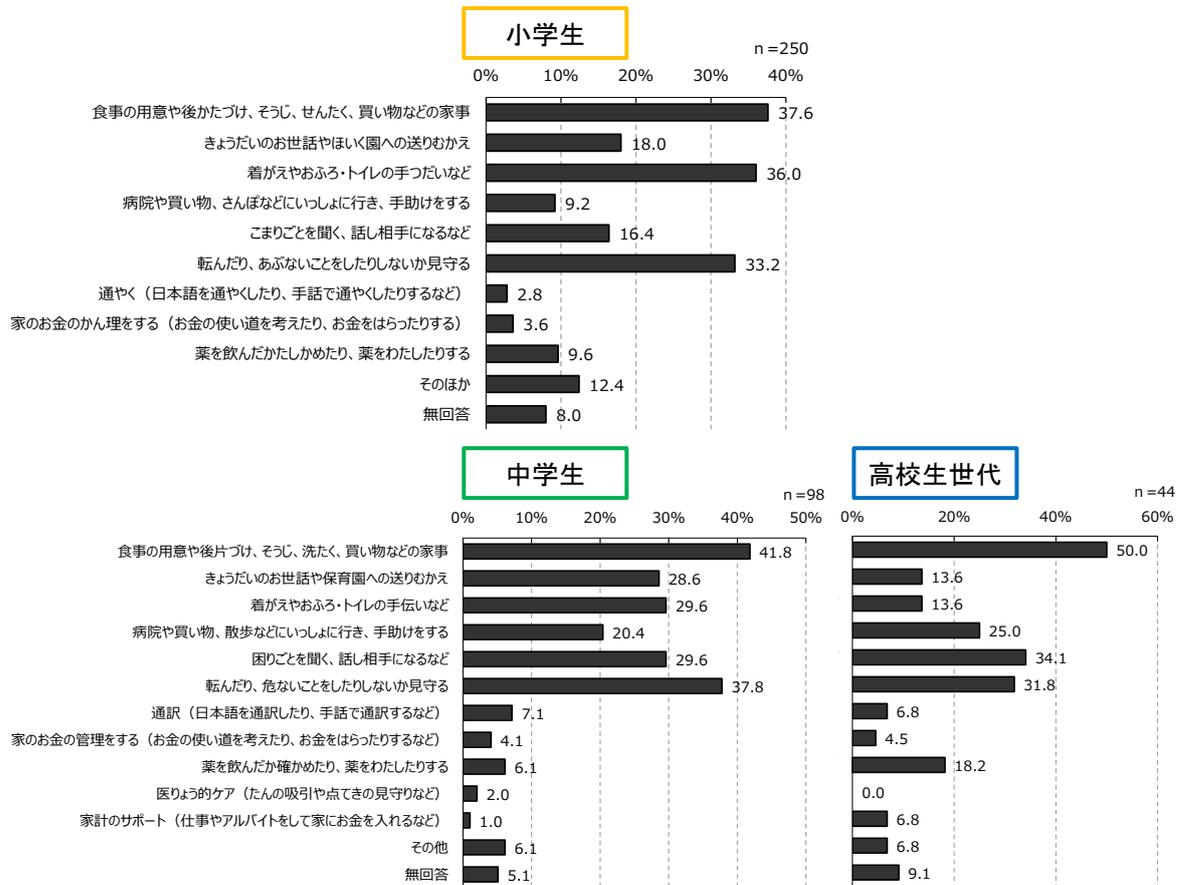
Ⅲ 品川区の実態（調査結果より）

1. 子ども向け生活の実態調査（令和5年度実施）

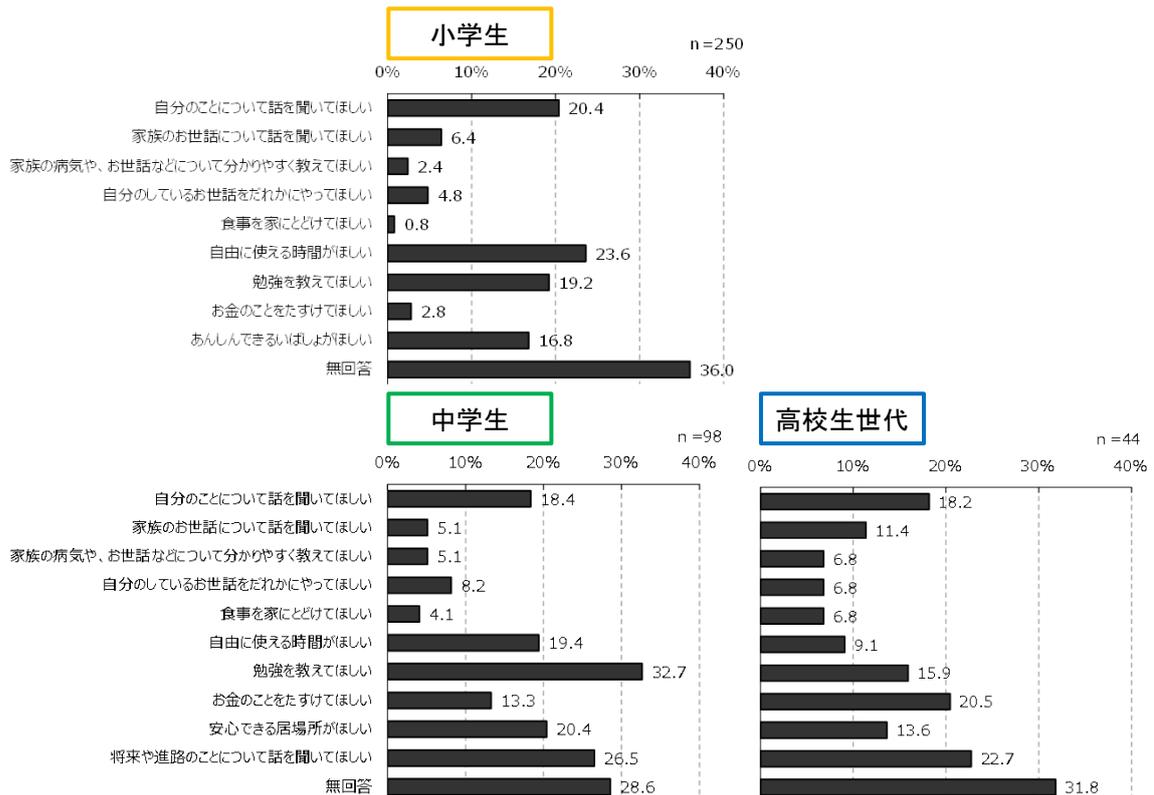
区内在住の小学4年生～6年生、中学1年生～3年生（7年生～9年生）、高校生世代（～18歳）を対象に、学校や家庭での生活や、家族のお世話の状況等の実態を把握するとともに、課題の解決に必要な支援策を検討するためアンケート調査を実施しました。

調査内容	主な調査結果
「ヤングケアラー」という言葉の認知度	「前から知っていた」と回答した割合は、小学生が31.7%、中学生が50.9%、高校生世代が70.0%。
お世話をしている家族の有無	自分がお世話をしている家族が「いる」と回答した割合は、小学生で7.5%、中学生・高校生世代で5.0%。その対象は、すべての年代で「きょうだい」が最も多く、次いで「母」がいずれの年代でも約3割だった。
ヤングケアラーへの該当の認識	お世話をしている家族がいる人のうち、自分がヤングケアラーにあてはまるところがあるかの問いに対し、「はい」と回答した割合は小学生が31.2%（「わからない」含め73.6%）、中学生が21.4%（同60.2%）、高校生世代が31.9%（同63.7%）。
お世話の内容	すべての年代で「家事」と回答した割合が最も高かった。「家のお金を管理する」「薬を飲んだり確かめたり、薬を渡したりするなど」「家計のサポート」は高校生年代で割合が高く、年代が上がるにつれてケアの内容が変化している。また、「通訳」の割合は高くはないが、いずれの年代でも一定数の回答があった。
お世話の時間とつらさ	「毎日」と回答した割合はすべての年代でも最も高く、小学生が43.6%、中学生が52.1%、高校生世代が36.4%。また、いずれの年代でも約15～25%が、平日に3時間以上家族のお世話をしていると回答。家族のお世話をしている時間が長い子どもほど、お世話をしているにつらいと感じる頻度が「いつもある」「ときどきある」と回答する割合が高かった。
家族のことやお世話の悩みを誰かに話した経験	すべての年代で6割以上が「ない」と回答。話したことがある中でも、相談相手は「家族」と「友人」が多く、専門職などの知識のある第三者の大人へ十分に相談できていないことがわかった。
学校や周りの大人にしてほしいこと	小学生では23.6%が「自由に使える時間がほしい」、中学生では32.7%が「勉強を教えてほしい」、高校生世代では22.7%が「将来のことについて話を聞いてほしい」と回答し、それぞれ最も高い割合だった。

■ どのようなお世話をしていますか。(複数回答可)



■ 学校や周りの大人にしてほしいことはありますか。(複数回答可)



■ あなたが家族のお世話をしている場合に、あったらいいなと思うことを教えてください。(自由記述 抜粋)

家事の支援

- ・家事を楽にする方法を教えてほしい。話を聞いてほしい (中学生)
- ・家事全般を誰かにやってもらい、自分が落ち着けて安心できる時間と空間がほしい (高校生)

通訳

- ・国が違くと細かいことで違いが出るためどう対応すれば良いか教えてほしい (高校生)

食事・配食

- ・食事を作ってほしい。それだけで十分 (中学生)

介護・介助

- ・教えながらお世話をしてほしい (小学生)
- ・信頼できる人と話しながら世話をしたい (中学生)
- ・少し本人の話し相手になってほしい (高校生)

相談・話を聞く

- ・LINEなどで話を聞いてほしい (でも誰にも言わないでほしい) (小学生)
- ・同じ悩みをもつ人と話してみたい (小学生)
- ・自分の話を最後まで話を聞いてほしい (中学生)
- ・気楽に何でも相談できる場所や人がほしい (高校生)

勉強・進路

- ・集中して勉強できる環境がほしい (小学生)
- ・進路についていつでも相談できる場がほしい (中学生)

その他

- ・自分の時間、自由時間がもう少しほしい (小学生)
- ・指示してくれる人がいたらいい (小学生)
- ・困っているところを、見て見ぬ振りや白い目で見ないでほしい (小学生)
- ・ありがとうやお礼の言葉を言ってもらいたい (小学生)
- ・家族のことについて詳しく教えてほしい (中学生)
- ・ひとり暮らしを数日でもしてみたい (高校生)

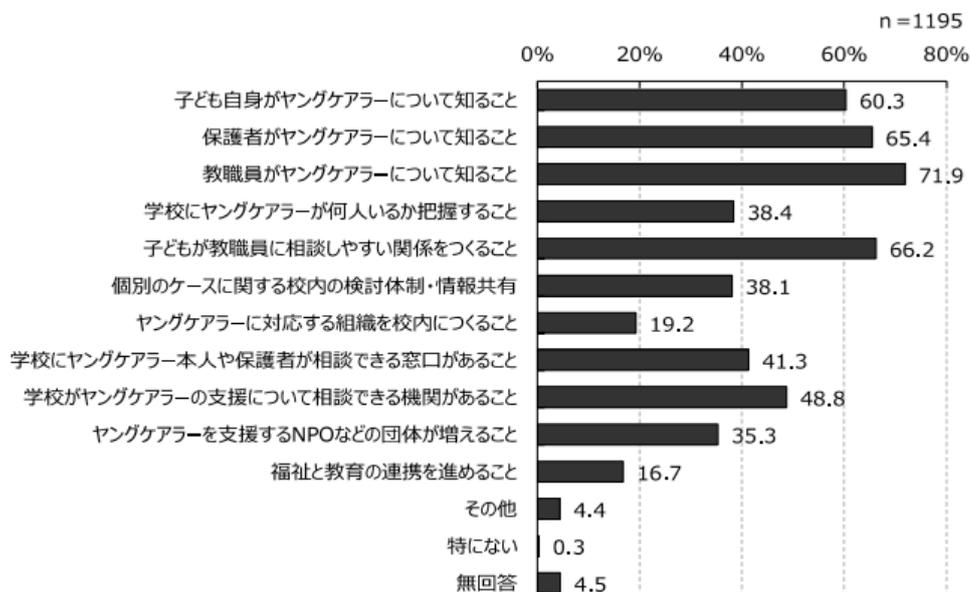
2. 関係機関向けアンケート調査（令和4年度実施）

学校関係者や普及啓発の研修に参加した関係機関職員に対して、ヤングケアラーに対する意識と実態について把握するとともに、その後のヤングケアラーへの支援体制整備の参考とするためアンケート調査を実施しました。

（1）学校関係者向けアンケート調査

調査内容	主な調査結果
「ヤングケアラー」という言葉の認知度	教諭・講師の10.2%が「聞いたことがない」、14.8%が「聞いたことはあるが、具体的な内容は知らない」と回答し、「言葉は知っているが、特別な対応はしていない」と回答した教諭・講師や養護教諭は約5割。
担任クラスのヤングケアラー児童	現在担任をしているクラスにヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した割合は6.2%。
子どもに出ている影響	「宿題や忘れ物が多い」「精神的な不安定さがある」「学校を休みがち」「遅刻や早退が多い」という回答が多くあった。
ケアを必要としている家族	世帯構成別にみると、ひとり親世帯（母子）では「母親」をケアする割合が約6割、ふたり親世帯では「きょうだい」の割合が約7割。
子どもがしているケアの内容	学年別にみると、きょうだいの面倒を見ている子どもは各学年とも約5割、家事を行っている子どもは学年が上がるにつれて割合が高くなる傾向が見られた。
ヤングケアラー支援に必要だと思うこと	「教職員がヤングケアラーについて知ること」の回答が71.9%、次いで「子どもが教職員に相談しやすい関係をつくること」が66.2%と多かった。

■ ヤングケアラー支援に必要だと思うこと（複数回答可）



■ ヤングケアラー支援について教職員にできること（自由記述 抜粋）

本人・保護者へのサポート

- ・声をかける。話を聞いてあげる。いつでも相談にのることを伝える。
- ・子どもの状況を把握する。話ができる環境を作る。
- ・休み時間や放課後に補習を行う。宿題や各教科の課題のサポートを行う。
- ・子ども自身が、自分自身の状況について情報を知る機会を提供する。
- ・保護者と共有し、保護者にも意識を持ってもらう。
- ・子どもらしく生活できる環境を整える。
- ・通訳ソフトの無料貸出や通訳同席での面談システムの充実。

関係機関との連携

- ・本人や保護者が安心して相談できる場の提供。
- ・家庭を支える対策をとる。
- ・他機関と連携を取りながら、サポートしていく。

校内でできること

- ・ヤングケアラーについての知識を得ること。
- ・校内での情報共有。共通理解。
- ・学校内で、話しやすい環境づくり。

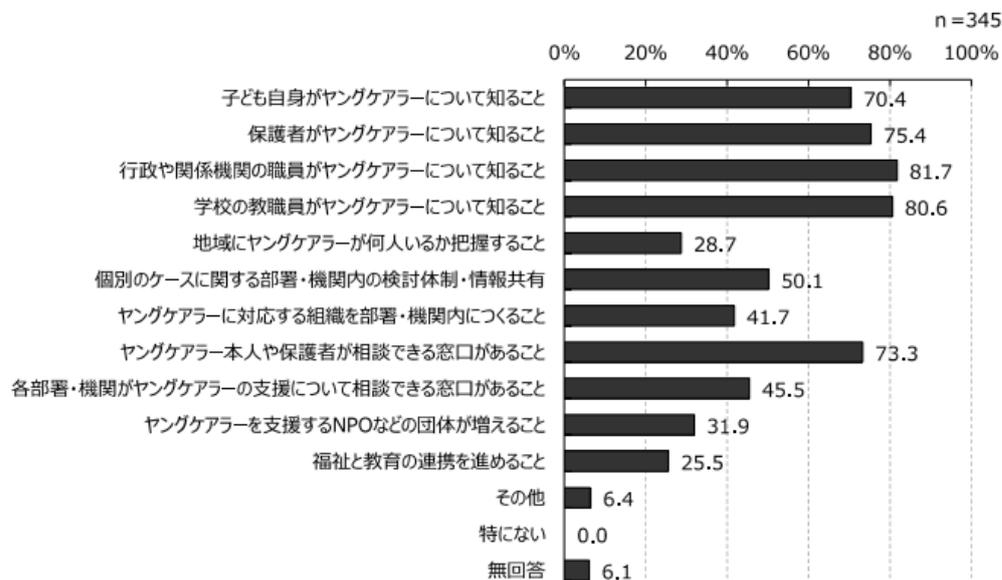
学校での対応の限界

- ・多忙で学校での対応は困難。
- ・教員のサポートだけでなく、福祉でサポートできる体制を作るべき。

(2) 関係機関職員向けアンケート調査

調査内容	主な調査結果
「ヤングケアラー」という言葉の認知度	「知っている」と回答した人は全体の7割以上となり、言葉の認知度は高いものの、「意識して対応している」と答えた人は全体の約2割。
今まで関わったヤングケアラー	今まで関わった家庭の中にヤングケアラーと思われる子どもがいたかについて、「いる」と回答した割合が46.0%、「いない」が41.2%、「わからない」が12.2%。
他機関との連携	ヤングケアラーと思われる子どもについて連携した機関は、「特になし（連携しなかった）」が最も多く39.0%。
連携しなかった理由	「どの機関と連携すればよいかわからなかったため」が22.6%、「具体的な連携方法がわからなかったため」が12.9%。
ヤングケアラー支援に必要だと思うこと	ヤングケアラーを支援するためには、認知度を上げることが必要と考える人が多かった。

■ ヤングケアラー支援に必要なだと思うこと（複数回答可）



■ 連携して支援を行う上での課題（自由記述 抜粋）

ヤングケアラーの普及啓発

- ・ヤングケアラーの定義をもっと多くの人が知ることができると良い。
- ・保護者や子ども自身が自覚できるようなPRが必要。

支援体制

- ・学校や公的機関に相談できる人が常駐していることが理想。
- ・どここの部署につなげばいいかわからない。
- ・終わりのないケアに対して、相談窓口がわからない。
- ・予備軍の子どもに行動を起こしにくい。

介入の難しさ

- ・お手伝いとこの区別が難しく、どの程度の段階で連携が必要かわからない。
- ・子どもが家族のためと思い、重荷に感じていない。
- ・障害や介護等は、ケアされる方にスポットがあてられがちになってしまう。
- ・家族の問題と言われ、介入を拒まれる。
- ・精神疾患等のデリケートな問題を含んでいる。
- ・代替のサービスを紹介しても、有料だと断られてしまう。